

歌占

ツレ 里人

シテ 度会の何がし

子方 幸菊丸

地は 加賀

季は 四月

「雪三越路の白山は。く。夏陰いづくなるらん。

「かやうに候ふ者は。加賀の国白山の麓に住居する者にて候。さても此程何処の者とも知らぬ男神子の来り候ふが。小弓に短冊を付け歌占を引き候ふが。けしからず正しき由を申し候ふ程に。今日まかり出で占を引かばやと存じ候。如何に渡り候ふか。歌占の御所望にて候はゞ御供申さうずるにて候。

「神心。種とこそなれ歌占の。引くも白木の手束弓。

「夫れ歌は天地開けし始めより。陰陽の二神天の街に行合の。小夜の手枕結び定めし。世を学び国を治めて。今も道ある妙文たり。

「占問はせ給へや。歌占問はせ給へや。神風や。伊勢の浜荻名をかへて。く。葭といふも蘆と云ふも。同じ草なりと聞く物を。所は伊勢の神子なりと。難波の事も問ひ給へ。人心。引けばひかるゝ

梓弓。伊勢や日向の事も問ひ給へ。日向の事も問ひ給へ。

ツレ詞 「如何に申すべき事の候。

シテ詞 「何事にて候ふぞ。

ツレ 「さて御身は何くの人にて渡り候ふぞ。見申せば若き人にて候ふが。何とて白髪とはなり給ひて候ふぞ。

シテ 「実にく普く人の御不審にて候。是は伊勢の国二

見の浦の神職なるが。我一見のために国々を廻る。或時俄に頓死す。又三日と申すによみがへる。それよりかやうに白髪となりて候。是も神の御咎めと存じ候ふ程に。当年中に帰国すべきとおこたりを申して候。

ツレ 「さては其謂にて候ふな。さらば歌占を引き申し候ふべし。

シテ 「やすき間の事一番に手に当りたる短冊の歌を遊ばさ

れ候へ。考へて参らせ候ふべし。

ツレ「承り候。教へにまかせ短冊を取り上げ見れば。何々北は黄に。南は青く東白。西くれなるの蘇命路の山。かやうに見えて候。

シテ「須弥山をよみたる歌にて候。是は父の事を御尋ね候ふな。

ツレ「さん候親にて候ふ者此程所勞仕り候ふ間。生死の境を尋ね申し候。

シテ「心得申し候。委しう判じて聞かせ申さう。夫れ今度の所勞を尋ぬるに。辺涯一片の風より起つて。水金二輪の重結に顕はる。夫れ須弥は金輪より長じて。其丈十六万由旬のいきほひ。四州常樂の波にうかび。金銀碧瑠璃玻球加宝の影。五重色空の雲に移る。されば須弥の影うつるによつて。南瞻部州の草木みどりなりと云へり。さてこそ南は青しとはよみたれ。こゝに又父の恩の高き事。高山

千丈の雲も及びがたし。されば父は山。染色とは風病の身色。しかも生老病死の次第を取れば。西くれなると見えたるは。命期六交の減色なれば。あふ是は既に難義の所労なれども。こゝに又染色とは。声を借りたる色どりにて。文字には蘇命路なり。よみがへる命の路と書きたれば。誠に命期の路なれども。又染色に却来して。二度こゝに蘇生の寿命の。種となるべき歌占の詞。頼もしく思

し召され候へ。

ツレ「あらうれしや。さては苦しかるまじく候ふか。

シテ「中々の事御心安く思し召され候へ。

ツレ「近頃祝着申して候。又是なる幼き人も占の所望にて候。

シテ「さてはおことも占の所望にて候ふか。以前の如く一番に手に当りたる短冊の歌を御読み候へ。

子「鶯のかひこの中の時鳥。しやが父に似てしやが父

に似ず。

シテ「是も父の事を御尋ね候ふな。

子「さん候父を失ひて尋ね申し候。

シテ「是は早合ひたる占にて候ふ物を。

子「いや逢はねばこそ尋ね申し候へ。

シテ「さりとは占に偽りよもあらじ。鶯に逢ふ言葉の

縁あり。又かひこの中の時鳥とも云へり。時も卯
月程時も合ひに合ひたり。や。今鳴くは時鳥にて

候ふか。

子「さん候時鳥にて候。

シテ「おもしろく。当面黄舌の囀り。鶯の子は子な
りけり子なりけり。不思議や御身は何処の人ぞ。

子「伊勢の国の者。

シテ「在所は。

子「二見の浦。

シテ「父の名字は。

子「二見の太夫度会の何某。

シテ「さて其父は。

子「別れて今年八箇年。

シテ「さておことの幼名は。

子「幸菊丸と申すなり。

シテ「こはそも神の引き合はせか。是こそ父の何某よ。

子「不思議や父にてましますかと。言はんとすれば白
髪。

シテ「身は白雪の面わすれ。

子「されども見れば我父の。

シテ「子は子なりけり。

子「時鳥の。

地「程経て今ぞ廻りあふ。占も合ひたり親と子の。二
見の占方の。正しき親子なりけるぞ。実にや君が
住む。越の白山知らねども。ふりにし人のゆくへ
とて。四鳥の別れ親と子に。二度逢ふぞ不思議な

る。く。

ツレ詞 「かゝる不思議なる事こそ候はね。さては御子息にて候ふか。

シテ詞 「さん候疑ひもなき我が子にて候。是も神の御引き合はせと存じ候ふ程に。やがて伴なひ帰国せうずるにて候。

ツレ 「近頃めでたき御事にて候ふものかな。又人の申され候ふは。地獄の有様を曲舞に作りて御うたひあ

る由承り及びて候。とても事に謡うて御聞かせ候へ。

シテ 「やすき御事にて候へども。此一曲を狂言すれば。神気が添うて現なくなり候へども。よし／＼帰国の事なれば。面々名残の一曲に。現なき有様見せ申さん。

地次第 「月のゆふべの浮雲は。く。後の世の迷ひなるべし。シテクリ 「きのふもいたづらに過ぎ。今日も空しく暮れなん

とす。

地「無常の虎の声肝に銘じ。雪山の鳥鳴いて思ひを痛ましむ。

シテサシ「一生は唯夢の如し。誰か百年の齡を期せん。

地「万事は皆空し。いづれか常住の思ひをなさん。

シテ「命は水上の泡。

地「風に随つて経めぐるが如し。

シテ「魂は籠中の鳥の。

地「開くを待ちて去るに同じ。消ゆる物は二度見えず。去るものは重ねて来らず。

クセ「須臾に消滅し。刹那に離散す。恨めしきかなや。

釈迦大士の慇懃の教を忘れ。悲しきかなや。閻魔法王の呵責の言葉を聞く。名利身を助くれども。いまだ北邙の煙を免かれず。恩愛心を悩ませども。誰か黄泉の責めに随はざる。是がために馳走す。所得いくばくの利ぞや。是によつて追求す。所作

多罪なり。暫く目を塞いで往事を思へば。旧友皆亡ず。指を折つて故人をかぞふれば。親疎多くかくれぬ。時移り事去つて。今なんぞ渺茫たらんや。人とゞまり我行く。誰か又常ならん。

シテ
「三界無安猶如火宅。

地
「天仙尚し死苦の身なり。いはんや。下劣貧賤の報に於てをや。などか其罪かるからん。死に苦しみを受け重ね。業に悲しみ猶添ふる。ざんする地獄

の苦しみは。舂擣にて身を斬る事。截断して血狼藉たり。一日の其内に。万死万生たり。劍樹地獄の苦しみは。手に劍の樹をよどれば。百節零落す。足に刀山踏む時は。劍樹共に解すとかや。石割地獄の苦しみは。両崖の大石。もろくの罪人を碎く。次の火煩地獄は。かうべに火焰をいたゞけば。百節の骨頭より。焰々たる火を出だす。或る時は焦熱大焦熱の。焰にむせび。或る時は紅蓮大紅蓮

の。氷に閉ぢられ。鉄釘頭をくだき。火燥あな
うらを焼く。

シテ「飢ゑては鉄丸を呑み。

地「渴しては銅汁を飲むとかや。地獄の苦しみは無量
なり。餓鬼の苦しみも無辺なり。畜生修羅の悲し
みも。我等にいかで勝るべき。身より出だせる科
なれば。心の鬼の身を責めて。かやうに苦をば受
くるなり。月の夕べの浮雲は。後の世の迷ひなる

べし。

シテ「後の世の闇をば何と照らすらん。

地「胸の鏡よ心にごすな。

シテ詞「あら悲しや唯今参りて候ふに。是程はなどや御責
め有るぞ。あら悲しやく。

ツレ「不思議やな又彼人の神氣とて。面色変はりさも現
なき其有様。

シテ「五体さながら苦しめて。

ツレ「白髪は乱れ逆髪の。

シテ「雪を散らせる如くにて。

ツレ「天に叫び。

シテ「地に倒れて。

地「神風の一揉もんで。く。時しも卯の花くだしの。

五月雨も降るやとばかり。面には白汗を流して。

袂には露の繁玉。時ならぬ霰玉散る足踏は。とう

くと手の舞笏拍子。打つ音は窓の雨の。ふるひ

わなゝき立つゝ居つ。肝胆をくだき神のおこたり。

申し上ぐると見えつるが。神は上らせ給ひぬとて。

茫々と狂ひさめて。いざや我子よ打ちつれて。思

ふ伊勢路の故郷に。またも帰りなば二見の浦。又

も帰らば二見の浦千鳥。友よびて。伊勢の国へぞ

帰りける。く。